

(04.08.15/17/20/22)

中国・威海、実験室宇宙物理夏の学校

高部英明

(本原稿は2004.08.04-13、表題の夏の学校の講師として招待された際の北京、威海での出来事・印象などをまとめたものである。)

概要：2004年8月4日-13日、中国に招待され北京4泊、山東半島先端の保養地、威海（ウエハイ）に5泊した。中国の物理学研究所副所長で友人のJie Zhangから4月頃、実験室宇宙物理夏の学校をしたい。予算請求するから、御前とあと一人くらいで講師を引き受けてくれないか、とメールが来た。そこで、フランスの友人セルジュに声をかけた。あとは、共同主催者で国家天文台の副台長のGang Zhaoとのやりとり。すぐ、担当のMs. Feilu Wangにバトンタッチ。セルジュと大まかに分担を決め、私の12時間分、全6章の講義を2週間くらい掛けて用意した。北京は3度目。今回は、国家天文台を訪ね、京劇を観劇、ショッピング街などを歩いた。DVDをたんまり買った。威海ではサッカー・アジア杯決勝を皆で観戦、毎日の豪華な料理、山東半島の先端「秦の始皇帝ゆかりの地」への遠足、威海大学学長との戦争観の議論、など。北京では中国物理学会会長との会談、市内見物。建設ラッシュの北京の様子など思い出すままに、見たものや、感想などまとめてみた。今日的中国事情も随所に書き込んだ。読んで頂き、コメントなどもいただければ幸いです。(04.08.21)。

1. 過去の反省無くして、正しい未来は築けない

出発の前日、サッカー・アジア杯の準決勝が日本ーバーレーン、中国ーイランと開催された。日本は先日のヨルダン戦で、開催地の重慶（チョンチン）の観客席が猛烈なアンチ日本で、日本がゴールするとすごいブーイング。国歌斉唱の際もブーイングがひどかった。戦争の恨み未だ健在を世界に見せつけた。重慶が太平洋戦争の初期（40年）に日本軍の重爆撃機による無差別爆撃を受けたことは歴史上有名である。その怨念を深い考慮もなく地元の住民はスポーツの場でぶちまけたのだろう。

一因は重慶の住民が国際スポーツ大会になれていないこと。スポーツに政治を持ち込まないという国際ルールがまだ行き渡っていない。他の要因は当然、日本がいまだに正式に中国への戦争を侵略戦争と位置づけず、正式の謝罪をしていないこと。これが、靖国神社の戦犯埋葬、小泉総理の公的参拝につながっている。

試合の方は延長、4：3で勝利。遅れて、北京で始まった中国ーイランは1：1の引き分けて、PKで中国が勝った。8月7日に北京で日本ー中国の決勝が行われる。娘は心配して、「お父さん、明日からの中国出張やめ」と言う。息子も「中国は嫌いだ。いまだにあんな昔のことで、こんなに悪態をつく」と。私は「日本政府はけじめを付けていない。正式に、見える形で中国

に謝罪すべきだ」と。日中国交回復が72年に毛沢東－田中角栄の間で電撃的に行われたが、両者が戦争認識を共有できたか定かでない。未だに、ギスギスした日中関係を考えると、共通認識は出来ていず、深い越えがたい溝が隣人同士には存在する。ナチスのパリ占領を乗り越えて、独仏がEUの盟主として連携している姿を見るに付け、日中は政治的に未熟な子供の感覚のままであると思う。

過去の反省無くして、正しい未来は築けない。

2. 中国国家天文台訪問、北京の銀座、京劇

翌、4日。10時の飛行機で北京に向かった。時差1時間。12時頃着陸。夏休みで、日本、韓国を中心に沢山の観光客でパスポート・コントロールは長蛇の列。30分は列んだか。出口には沢山の迎えて、私を出迎えるはずのFeilu（フェイルー：漢字は「菲鹿」。「菲」はかぐわしい花を意味し、「鹿」は彼女が生まれた町、内モンゴル州のパオトウのシンボル）が見あたらない。2度目に見つけた。内モンゴル自治区出身の4月に博士を取得したばかりの研究者で、今は講師。専門は星形成に関連した原子物理で、オパシティーの理論計算。北京大学出身。

良く笑う子だ。英語はかなり上手で、冗談も良く通じる。タクシーでIOP(Institute of Physics:物理研究所)の宿舎へ。立派な宿舎だ。02年の12月に来た時は無かったような気がする。とにかく、研究所の周りも、町中も、建設ラッシュだ。歩いて20分ほどの大通りに面した所に大きなデパート（仏系デパート）があるというので出かけてみた。きれい、大きい、安いで、見栄えのする運動靴を買った。119元（1元＝15円）。

翌日、午前中、「国家天文台」(NAO,C)を訪問した。北京の北の方、IOPからタクシーで20分くらい。このすぐ近くに2008年、北京オリンピックのメイン・スタジアムが出来そう、周りは工事だらけ。菲鹿(Feilu)のオフィスは大変機能的な机のしゃれた部屋だ。他の部屋の若手に挨拶をした。彼ら3人は夏の学校に来た。副台長で今回の学校の主催者の一人のGang Zhao（以下Gang）が用事でいないので、向かいの部屋の教授を紹介してくれた。彼と話をしていたら、夏の学校に興味を持って「俺も行くから、菲鹿(Feilu)、チケットと宿予約たのむ」と。彼は、イタリアのトリエステのICTPの横にある宇宙物理の研究所(SISSA)で博士号を取った。その時の先生が、今回、星の進化の夏の学校の講師で来てくれたので、彼も連れて行きたいと。この判断はまずかったことが後になってわかる。

天文台見学はこの程度で、宿舎に一端帰る。時間があるので、市内の目抜き通りに買い物に出かける。北京は3度目だが、いつも観光地見学程度でショッピング街を歩いたことがない。こういうところを一人で歩いてみないと、町の様子や、市民の生活レベル、若者の嗜好などわからないものだ。漢字で通りの名前を書いて、タクシーの運転手に見せる。IOPは北京大学などがある北京市の北北西の当たりにある。ここから、天安門広場まで直線距離で10kmくらいか。中国のタクシーは、沢山走っていて、便利で、親切で、安い。初乗り10元（1元＝15円）。天安門広場近くの広い歩行者天国のある通りまで25元程度。帰りは、研究所の名前と住所を書いた紙でタクシーを使ったが、迷って、40元かかった。それでも安いでしょ。

北京の銀座と言われる「王府井大通り」の歩行者天国に入っすぐ、大きな百貨店がある。ここで、昼飯に本当はケンタッキーを久しぶりに食べたいと思っていたが、看板はあるが場所が

分からず、中華風にした。CDショップでDVDを見た。DVDがとても安い。古いのも、新しいのも、一本15元から25元だ。「トロイ」も「スパイダーマン2」も「I'Robot」も出ている。共に15元。買った。日本の古い映画もある。黒澤明監督、原節子、三船敏郎、久我美子の「白痴」や、小津安二郎監督、笠智衆（りゅうちしゅう）、原節子、杉本春子の「東京物語」（53年作品）。どちらも滞在中に見た。原節子の映画を見るのは初めてかな。高校時代から名前は知っているのに、イメージがだいぶ違っていた。白痴では魔性の女を演じている。久我美子は知的な美人である。まだ、20代前半だ。東京物語の老夫婦は尾道に住んでいる。知らなかった（女房の実家が尾道）。笠の演技が良い。私が生まれた年に、もう、こんな老人だったとは知らなかった。ところが、それが私の思い違いと、後日、知り合いから教えて頂いた。東京物語の時の笠智衆はまだ49才。奥さん役の東山千栄子が63才。彼は14才も年上の女優を相手に違和感なく70才くらいの老人を演じていた、見事なまでの天性の老人役者だったというわけだ。寅さんシリーズの和尚さんのイメージと同じだ。

夜、6時半に菲鹿(Feilu)が迎えに来て、二人で京劇を見た。前回2度の北京訪問時も見したが、あれは観光客専用のちょい見せの京劇だ。天安門広場近くの京劇専用の劇場（名前は「湖廣會館」）。着いたら始まったばかりだった。出し物は2つで1時間の観劇だ。京劇は茶を飲みながら、茶菓子をつまみつつ見る。従って、通常のレストランのように長方形の机に3方向のみ椅子を置いて見る。前列2番目の良い席で楽しめた。出し物は、最初は創作京劇で「断桥」。悪僧法海にかどわかされた夫・許仙を奪い返そうと、金山寺に赴いた白素貞（白蛇の変身）。彼女と妹分の小青と優柔不断な夫とのやりとりである。2番目は「火焰山」。副題が「孫悟空、三たび芭蕉扇を借りる」。三蔵法師一行が火焰山にさしかかったが、その炎を消さないと先に進めない。そこで、炎を消せる鉄扇姫の持つ扇を借りに出かけるが、悟空に息子を殺された恨みのある鉄扇姫は易々と貸してくれない。そこで、孫悟空が立ち回り、というお話。菲鹿(Feilu)曰く、「あの悟空下手ね。以前見た悟空はもっと上手に棒を操っていた」と。

京劇と言ってもその歴史は新しい。清朝に上海近辺（蘇州）に伝統的にあった芸能を、皇帝を楽しませるために北京に持ってきて、今日の京劇になった。京劇の振り付けは歌舞伎に似たところもあり、「見得を切る」ような場面も出てくる。英語ではBeijing Opera と言うが、オペラ通の私に言わせれば、オペラとは大いに違う。歌は男女とも高音発声で演歌のような歌を繰り返す。観劇している人たちはほぼ全員、外国からの観光客。一番前でイヤホンをして歌の内容を聞いているのか、そのまま上を向いて寝ている日本人のおじちゃんがいた。

菲鹿(Feilu)は受講生達のテキストの作成などで休む間もなく働いて、私に付き合ってくれている。夕食もまだだろうと、「ペキン・ダックを食べに行こう。天安門広場の前の老舗に」と誘う。時間が9時を過ぎていて、2階のレストランは閉まっている。一階のペキン・ダックと飲み物だけ、というフロアで食べる。私はジョッキにダックで、確かにおいしい。この店「全聚徳」は全中国に400店舗の支店があり、家族で上海に行った際、2回も行ったおいしい店である。ダックだけでお腹がいっぱいになった。菲鹿(Feilu)はさすがに食べあぐねて、残りをパックしてもらい、友達にあげるため持ち帰った。

3. 広いビーチのある威海（ウエハイ）のホテルに着く

翌朝、8時に着くSerge（セルジュ）,Stephan（ステファン）（Serge は今回のもう一人の講師としてお願いした。Stephan は友達）。を迎えに空港に行く。そのまま、威海(Weihai)の一つ前

の煙台(Yantai)に着く国内線に乗る予定。菲鹿(Feilu)が迎えに来て、ホテルを7時に出た。着いて、コーヒーを飲んで(菲鹿は「コーヒー飲むと眠れなくなる」と、生まれ育った内モンゴルのミルク)、時間待ち。8時前には出口に行ってセルジュを待つ。しかし、50分過ぎても出てこない。何度か、私がうろうろ探す。何度か目の時、出てきた。セルジュは01年のIFSA会議の京都がアジアの初めて。今度は中国に始めて来た。ステファンはアジア自体が初めて。

10時過ぎの飛行機で1時間弱の煙台に着く。ここでタクシーに乗り、高速道路で威海へ。130キロでぶっ飛ばす。道は片側2車線で整備されている。エンストの車も見あたらない。高速を抜けたところには古い農家などある。高速を走る間、両サイドは緑の深い畑が広がる。山東半島は野菜や果物など、北京などの台所だそう。近くを流れる黄河のおかげもあり、土地が肥えているのだろう。

威海(ウエハイ)の町は人口53万人。韓国に近く港もあることから、韓国との合弁会社がたくさんある。人口の1/3は韓国人だそう。確かに山東(シャントン)半島の先に近づくほど、漢字の下にハングルを併記した会社が増える。威海は元々、英国の租界であった。車で2時間半で、青島(チンタオ)に着く。青島は元々、ドイツの租界で、第一次大戦の際、日英同盟に従ってドイツと戦った日本が占領し、第二次大戦が終わるまで日本の租界地とした。ドイツの租界時代にビール技術が伝授され、今日の青島ビールとして世界中で知られている。

さて、タクシーは昼過ぎに、**Summer School on Laboratory Astrophysics**の会場でもあるホテルに着いた。「山東大学国際研究中心」という名の6階建ての大理石をふんだんに使った立派なホテルである。ここは、山東大学が所有しているホテルで、大学を通すと割安料金で利用できる。着いたら、他の会議なども開催されていた。中に、**Brookhaven National Lab. NY**の**RHIC (Relativistic Heavy Ion Collidor)**に関する国内会議も開催されていた。中国チームの会合だ。

ホテルは3階の312号室。電子ドア。ツインで広い部屋だ。ロビーも広くて海岸側は総ガラス張り。ここから左がビーチで、1km以上の長さのビーチには人がいっぱい。その先には20階以上の高層ホテルが2棟、建設中だ。

着いて一休みして、ビーチを歩いた。女性の水着の流行はワンピースかセパレートでもビキニではない。流行として日本より40年は遅れているのでは無かろうか。中にビキニもいるが、全て外国人。話している言葉からロシア人。ロシア人が沢山、中国(と云うより、世界中)に出稼ぎに来ている。今日は木曜というのに、ビーチにはすごい数の人が泳いだり、遊んだりしている。これだけ、遊ぶ余裕のある人口が増えていることは、いかに、この国が豊かになっているかを如実に示している。

この日から、豪華な中華料理の晩餐が始まった。次から次と出てくる珍しい料理に、セルジュとステファンは目を丸くしている。この日は国家天文台の副所長**Gang**の奥さんと息子(中学2年)を紹介された。夕食の後、菲鹿(Feilu)に誘われて、買い出しに行く。ホテルがビーチの横で、ビーチから市内の方に30分くらい歩いて、人に聞きながら、大きなスーパーを見つけた。夜の9時というのに、多くの人でひしめいている。ありとあらゆる食品を売っている。これを見てもこの国が豊かになりつつあることが明らかだ。菲鹿たちは明日からの会議の休憩時のコーヒーやスナックなどを買っている。私は早速、コーリャンを原材料にした中国の「白酒」を見つけ、セルジュに飲ませてやろうと買う。アルコール53%だ。良いもので千円程度。これを買う。帰りはタクシーを使った。実は、セルジュからシャンペンを土産にいただいたことも

あり、帰って白酒をプレゼントした次第。

4. 夏の学校初日そしてサッカーアジア杯決勝

翌朝、朝食は7時半から。バイキング形式。授業は8時半から始まる。朝食の際、Jie Zhang (物理研究所副所長、夏の学校主催者) が出てきた。昨夜、10時頃ホテルに着いた。娘のChristina (9才) と一緒。奥さんは仕事で別の所。Jie Zhang (菲鹿は「ジョン・ジー」と発音している。以下、Jie。姓名は「張杰」) は私の共同研究者であり阪大での実験室宇宙物理の実験に参加する。また、私はJie の学生で理論専攻の学生の一部指導もする。早々に、アジア太平洋物理学会連合(AAPPS)の事務局の件を話し合う。ほぼ、予想通りの反応である。

8月7日(金)、8時半より夏の学校が始まる。午前中に20分の休憩を挟んで2件、午後1件のペースで、一日、5時間の授業を4日間したことになる。まず、私が午前前半で後半がセルジュ。12時には終了し、昼食。これがまた豪華な中華料理で、会議中食べてばかりいたような印象がある。午後は1時半から3時半まで私が講義して終了。後は、水泳だ。

当初は午後、泳いでから4時から午後の講義のはずだった。ところが、この日は、電力不足でエアコンが全て使えないとの通知が各部屋にあり、急きょ、午後講義を終えて遊ぶことになった。実際、これだけ経済の急成長を遂げているのだから、電力供給が追いつかなくなるのもうなずける。講義の途中で、暑いな一と思ったが、場所が半地下の一階の会議室で、耐え難いほどにはならなかった。翌日は、今度は一日、水道がストップした。電気、水。文明に欠かせないインフラを経済の成長に合わせていくのは大変だろう。そういえば、高速道路から、原子力発電所らしき煙突が見えた。中国は、黄海沿岸に多数の原子力発電所を作る計画であるとか。一つでもチェルノブイリのようなになったら、気流に乗って、九州から中国四国と深刻な放射能被害を受けるだろう。この意味でも日中協力は極めて重要である(すでに、酸性を帯びたスモッグは九州西端に迫っている。近い将来、酸性雨で山陰の山などが丸裸になる可能性がある)。

誘われて、私も泳いだ。海水パンツも水中メガネもキャップも用意して来た。ホテルからビーチまで歩いてすぐだから便利だ。学生達を見つけ、泳ぐ。気温は30度を超えていると思われる。水温は初め、冷たい。しかし、つかってしまえば心地よい。この海水浴場は条件が大変良い。まず、肩までの水深が沖合200m程度まで続いている。全て砂地だ。また、山東半島のおかげで入り江になっているので、波がとても弱い。自然の巨大なプールと形容できる。私は久しぶりで泳いだ。ここでも感心したのが、Jie Zhang が泳げない学生に一生懸命泳ぎ方を教えていることだ。彼はとても熱心に学生の面倒を見る。研究だけでなく、家父長の貫禄と意識がある。

この日はサッカーのアジア杯決勝が8時から北京である。中国のスポーツ新聞をカメラで撮り、その写真を映しながら「中国は決戦の準備万端。相手は日本。良い試合(exciting game)を期待している」と英語で書いて今日の講義を終えた。夕食後、ロビーにいたら学生の一人が「高部先生、このホテルにはサッカーの試合が放映されるCCTV5 が配信されていません。私たちのホテルは小さいですが試合を見ることが出来ます。いらっしゃいますか」と聞いてきたので、誘いを受けることにした。歩いて10分程度のホテルに着くと学生が10人ほど始まるのを待っていた。ツインの部屋の真ん中にソファを置いてくれており、ここに座れと言う。皆に囲まれて真ん中に陣取る。

「先生はどちらを応援するんですか」と聞くので「もちろん日本さ」と。試合が始まる前に、大声で皆に言う「いいか。最も大切なことは平和だ。試合の結果ではない」。今回は来る前から重慶での日本の試合に中国の観客のブーイングの激しさに、改めて60年経っても消えない両国の軋轢に悲しい思いをした。中国に行く私を心配して娘は「お父さん、出張やめとき」と何度も言った。最後には「決勝は見たらあかんで」と。しかし、学生に誘われて断るわけにはいかない。私は彼らを信頼している。

試合は日本が先取。中国がすぐに同点に。この時は正直、少しホッとした。このまま延長でも良いかな、と。中国のディフェンスは堅い。2点目が入る。「あれはハンドだ」と、何度もCCTV5放送がそのゴール・シーンをテレビが流す。このまま2：1で日本が勝と後味が悪いな、と心配する。しかし、最後の3点目が見事に決まり、学生達も力の差を認めざるをえないという雰囲気になった。試合は終わった。日本の勝ち。やった、と大きく手を伸ばして何度かガッツポーズをする。学生が「Congratulation」と。ありがとうと言葉を残して早々に去る。

5. 威海大学学長、「I hate Japanese」

翌日(8/8)は午前の2講義をセルジュがする。午後2時から私がして4時には終わる。講義の後、少し雨が降ってきた。今日は、歩いて5分の山東大学威海校(彼らは威海大学と言っている)を見学。山東大学は7つのキャンパスを持ち、米国のカリフォルニア大学と同じように各キャンパスがほぼ独立した運営をしているようだ。威海大学は20年ほど前に出来た新しい大学(学生数1万5千人)。中央には10階建ての立派な建物がある。その中を見学した。建物の中央部分は全て図書館。ゆったりした閲覧机が並んでいる。屋上に上がり四方を眺める。小雨上がりの曇り空のせいもあるが、景色がかすむ。たぶん晴れていても霞んでいただろう。中国はどこに行っても、モヤリとスモッグで霞がかかっている。夏だから、少しはました。

学内を散策し、2階建ての建物群の近くにきた。その一つに今度、Jie Zhang が所長でZhao Gang が副所長の理論物理研究所を作る。大広間の一階を10個くらいの部屋にして、長期に滞在して研究が出来るようにする。見せて頂いたが、なかなかいい所だ。「じゃ、俺が本を書きたい時、ここに籠もって書いてもいいか。予約するぞ」というと。「大歓迎だ」と。来年の夏休み当たり来るか。

今日は6時からホテルの屋上でバーベキューをするそうだ。屋上に上がると、早々に準備が始まっていた。適当に配置された10脚ほどの丸テーブルにめいめいが座り、勝手に始めた。飲み物も各種用意されている。ホテルの料理人とボーイ達が来ていて、料理し、配膳してくれる。ここで、中国の「白酒(バイジュ)」(アルコール32度)を少ししたしなむ。今日、訪問した威海大学の学長が来ていて、挨拶に来た。専門は物性で、阪大の超伝導フォトニクスを訪問したことがあるという。彼に、超伝導がレーザー研と合併したことを伝えると、驚いていた。

色々な串刺しや海鮮料理などが運ばれてくる。学生が来て、白酒の乾杯合戦。乾杯(カンペイ)だから飲み干して下さいと。学生はこれをコップ半分はついで飲み干してしまう。こちらはたまったものではない。9時頃、セルジュ達は部屋に戻ったので、Jie やGang 達と飲み続ける。ここに、香香(シャンシャン)という修士1年の女子学生がいて、ビールの乾杯を何度かする。かなり強そうだ。彼女は菲鹿(Feilu)と天文台の同じ部屋にオフィスがあり、観測のデータ解

析などしている。（彼女は翌日、腹痛でダウンした）。

そんな所に、威海大学学長が新しい客人を連れてまた現れた。客人の相手を終えて、私たちのテーブルに来た。かなり、酔っている様子。話をしていたら「俺は日本人が嫌い(I hate Japanese)」と、ストレートに来た。そこで、私が「たぶんそれが中国人の偽らざる言葉だと私は思う。しかし、日本人にも色々な日本人がいることを知ってほしい。私は、先の戦争に関する色々な本を読んだ。その結果、あれは日本の侵略戦争であり、日本政府は正式に謝罪すべきだと個人的に考えている。日中外交は米国のニクソン大統領の電撃的北京訪問で始まり（日本はこれを「頭越し外交」と言った）、当時の田中首相が米国の後、あわてて北京を訪れて国交樹立した。たぶんその中で、中国への謝罪など詠われているとは思いますが、中国人も日本人もよく知らない。ドイツが事あるごとに歴史認識を明確にし、今日のEUの中核を担う信頼を勝ち得たような、明確な謝罪を日本は行ってない。ここに、問題の原点がある。私は近い将来、靖国神社も戦犯を分祀（ぶんし）し、日中戦争の総括をし、責任を明確にして、歴史観を日中で共有する必要があると思う」の様なことを丁寧に説明した。

また、「満州国建国など関東軍の独走を抑えられなかった当時の政府には当然責任があり、直接手を下した、下していない、の如何に関わらず、責任問題を明確にするべきである」などと話した。確かに東京裁判は勝者主導の裁判で、広田弘毅のような、むしろ反戦に動いた外務大臣が絞首刑になった経緯もある（城山三郎の「落日燃ゆ」に詳しい）。しかし、それを言い出せばいつまで経っても胸の中で日中の戦争状態が続くことになる。東京裁判を不当と言うなら、日本政府が調査委員会を作り自らの手で戦犯を明らかにすればよい。既に私の歴史観を聞いていたJie とGang が横から応援もしてくれ、学長の認識が変わったようだ。「わかった。俺はおまえが好きになった。いつでも好きな時に来い。来る時は直接俺に電話しろ。おまえの望みなら何でも聞こう。いつでも歓迎する」となった。

私が最初に中国に来たのは1997年8月。北京のIAPCM(Institute for Applied Physics and Computational Mathematics)で一週間、レーザー核融合の講義を依頼され、招待されて訪中した。その際、研究所の応接室に訪問者の記帳録があり、そこに2ページにわたり日本語とその訳の英語を書いた。内容はおおむね上記の内容で、日本人の一個人として、中国への侵略戦争を日本陸軍が行った過去を陳謝したい、と書いた。たぶん、今でもこの研究所を訪ねる人は私の文章を目にすることが出来るであろう。今は、この研究所の所長になった、ZHU Shao_Ping 教授が、何時だったか日本で「高部先生の文章読みましたよ」と言っていた。私は学長にその話もして、私の考えは一貫していることを伝えた。

その後、学長との話がアジア太平洋物理学会連合(AAPPS)の件に移った。説明をする内に、学長が話しにえらく乗り気になった。「その中国オフィスを考えているなら、是非、威海大学に置け。おまえが要求する建物人員を言うとおりに用意する。10階建てのビルがいるなら建ててやる。何でも要求してくれ」と。私が「今の言葉、冗談じゃ無いでしょうね。ここにはJie やGang など証人もいますよ。貴方の申し出をありがたく拝聴しておきます。ありがとう」。こんな話の最中も白酒を飲み交わした。私も明日は遠足で講義をしなくてよい気楽さもあり、11頃まで飲み明かした。

6. 「天国の尽きる所」への遠足、秦の始皇帝から自然動物園と島巡り

朝、3時に目が覚める。すごい吐き気と頭痛で眠れない。あの白酒のせいだ。コーリヤンは甘い香りがするため、飲んでいてきついアルコールを飲んでいる気がしない。そのために、ついつい飲み過ぎる。いつものパターンだ。今日は朝食が7時、8時にはバスが出る。朝食時、食欲がない。たぶん顔は青いだらう。Gang 達が大丈夫か、と聞く。少し飲み過ぎたね、と答える。食事に手を付けず、オレンジ・ジュースを何杯も飲む。遠足の用意をして、ロビーに出たら昨日の学長がいた。学長が「おー、御前、かなり飲んでいたが、大丈夫か」と聞いてきた。私はそれには答えず、「学長こそ、大丈夫ですか？」と聞くと、「いつものことさ。これが学長の仕事」の様なことを言う。学長はGang を迎えに来た。Gang は今日、威海大学でX線天文学関係の講義をするため、遠足には参加しない。何でも、昨夜の食事で香香（シャンシャン）が腹痛になり、朝早く医者が来た。学生の2人がやはり腹痛で、遠足に参加できない。Gang の奥さんも腹痛だそうだ。バーベキューで魚貝類の何かがまずかったようだ。私は、色々食べたが（半生のレバーも食べた）、腹痛はない。二日酔いの頭痛と吐き気だ。これは自業自得。

バスに乗って、威海の中央通りを走る。町自体かなり広い。建物も立派なビルが沢山並んでいる、が、どうも安普請という感じがぬぐえない。建てて数年と思えるビルも何となくガタが来ている感じがする。ガイドが早口の中国語で町の説明をする。バスのテレビには歌番組が並ぶ。テレサ・テンはこの国では「鄧麗君」の名で有名である。彼女の歌の字幕には、上に日本語、下に中国語の歌詞が付く。よく見比べていると、直訳ではない。中国でも「カラオケ」は大変流行しており、最終日前夜には後で書くように、カラオケ大会となった。中でも、鄧麗君、千昌夫が人気だ。バスが市の郊外に来ると、両脇の会社の名前が漢字とハングルの併記になる。威海は韓国まで75キロ。韓国との貿易でも栄えている。威海の住民の1/3が韓国人だそうだ。菲鹿(Feilu)が「Korea」というから、「南か北か、どっちのKoreaか？」と聞くと、「もちろん南で、北はこの国ではKoreaとは言わない」と。

バスに揺られて、2時間弱。「天国の終端(The End of Heaven)」に着いた。ここは、国家指定の重要観光地。山東半島のまさに先端で、断崖絶壁である。漢字では「天尽头」と書いている。バスが止まってまず目についたのは、古代中国の皇帝らしき人物が馬車に乗った石像。それを取り囲む家来文人達。ここは、秦の始皇帝が中国を統一し、何度も国内を行幸した中で、晩年、不老不死の薬を求めて訪ね、病重くなくなったことで有名な地である。至る所に、始皇帝の銅像や彼を祀った寺などの復元がある。彼についての詳しい記述もある。私は中国共産党と秦の始皇帝は相容れぬ仲だと確信していたので、このような大げさな名所を見てびっくりした。これも、鄧小平の経済優先の改革路線の一面なのだろう。

私は中国の古代史は大好きである。作家では宮城谷昌光の作品が大好きでほとんど読んだ。また、司馬遼太郎や井上靖の作品など昔から好きだ。高校時代、世界史を取ったが、その時から中国の歴代王朝の興隆衰退がダイナミックで特に惹かれた。だから、始皇帝と聞くと色々な話を思い出す。それを、菲鹿(Feilu)やセルジュ達に教えてあげた。菲鹿(Feilu)が「貴方は中国人よりも良く中国の歴史を知っている。私も高校で習ったがほとんど忘れた。文系で歴史を専攻してでもないかと、そんなこと知らないよ」と。

偶然、1ヶ月ほど前に読んだ「項羽」（永田英正著、PHP文庫）の最初のあたりに始皇帝の最後の場面がある。彼は今の杭州（上海の南）に御幸した後、海岸沿いに山東半島に達する。そのころから体調を崩し、河北省で亡くなる。紀元前210年、始皇帝崩御。その後、有名な陳勝・呉広の乱が始まり、秦の国はあえなく滅びていく。そこに現れるのが楚の名門の出身、項羽と、名もない農民出身の劉邦である。二人については司馬遼太郎の「項羽と劉邦」などの書

に語られている。項羽については「項羽と虞美人」など京劇の名場面であり、「四面楚歌」はこの時の項羽の言葉から生まれた。

今日は梅雨前線が近づいているとかで、霧が濃い。時に小雨も舞い散る。始皇帝を祀った広場から「天尽頭、こちら」の矢印に従い、断崖を降りながら海岸線に出て、また、それを上り、今度は「始皇帝が鮫を矢で射った」という名所に来る。うまい具合に捕鯨船の先端のような岩場がある。そこから、また、岩場を上っていく。実は私は昨夜のアルコールでほとんど死にそうな思いで、皆の最後尾について行っている。セルジュも日頃の運動不足か、私につきあってくれている。それを、菲鹿(Feilu)が、皆からはぐれないように、心配しながら着いてきてくれる。

しばらく歩いて、漸く「天尽頭」の記念碑に着いた。ここには、「秦」の戦闘旗が無数にはためいている。「秦」のことを中国語で「チン」と発音する。そこで学生に「清」と発音が同じじゃないか、と聞いた。彼曰く、秦は「チン」と最後を上げる。しかし、「清」は上げない。だから音は違うんだ、と。「チン」に対応する漢字は4つあり、4つともアクセントを含め音は異なるとのこと。難しい。この記念碑の横には広場があり、そこには秦の始皇帝と、少し離れて漢の劉邦達の群像があった。始皇帝は正面をにらみ、劉邦は頭を垂れている。劉邦は東方の賢者を迎え入れているところ、と書いていた。

7. これが本当の自然動物園？

「天の尽きる所」を後に、昼食の場所にバスで移った。地図にも載っているこの地方の一流レストランである。確かに立派な構えのホテルで、その一階がレストラン。にわか観光ブームで、かつては僻地の寒村だったところが大金持ちになっている。途中、大きなレストランの建設現場の横を何カ所か通り過ぎた。北京など経済特別区の人たちが裕福になり、週末や夏休みなどの休暇を、このような僻地まで来て楽しめるようになった。その豊かさのおこぼれで、この地の農家はにわか大金持ちになりつつある。これがまさに、経済効果だ。目の前の豪華な料理を前にして、それでも私は二日酔いで食欲がない。

ホテルの目の前にある動物園を見学する。と云っても、広い大きな自然動物園で、私たちは天蓋のないライオンやトラの住居の上の通路を歩きながら見る。「トラはさすがに大きいな」などと言いながら歩いている。すると、前の方に人垣が見ると、何と、生きた鶏の足にひもを付けて、トラの檻に降ろしているではないか。「えー、こんな餌やりをするの」と驚いていると、4匹が集まった大きなトラがコーッ・コーッと鳴く鶏めがけて、よだれを垂らしながら、立ち上がっている。ヒモが下がったところで争奪戦。一匹が捕まえて、さっと移動する。すると、これが掟なのか、他のトラはそれを奪おうとして追いかけてたりしない。勝者が決まった段階で終わりなのだ。勝者のトラは、少し離れた木陰で、鶏の羽をむしるように肉に食いつく。

セルジュとステファンが驚いて、「おまえの国でもあんなことするのか」と聞いてくる。「俺も驚いたさ。日本でも入園者の前で生きた肉を食わせるなんてしないさ。きっと、おまえの国のブリジット・バルドーが見ていたら、中国共産党に怒鳴り込むところだろうな」と。確かに限りなく自然に近づける動物園のあり様かわからないが、子供の前でいいのかなーと、カルチャー・ショックに似たものを覚える。歩いていくほどに、豹の所でもやっている。よく見ていると、どうも、入園者が50元を出して係の人に用意してもらい、つるして楽しんでいるよう

だ。さすが、中国人はすごい、と変な感心をした。

しばらく行くと、猿の檻。入ったところに「Prison of Monkey」と書いている。てっきり猿の檻と思ったら、そうではない。その奥には檻もない山に沢山の猿がいる。それに近づいて子供が餌をあげている。危ないな、と思ったら、ムチを持ったおばさんが2人、猿を監視している。先ほどの猿は、それでも悪さをした猿の本当のPrison だったんだ。とにかく、この動物園は鳥の所などは人間が大屋根の鳥小屋に入っていく。ミュンヘンで同様の鳥舎をみて感心したことがあるが、西洋の進んだところを取り入れているようだ。ハゲタカがいた。セルジュが餌をやるうとしても食べないので、中の方に進んでいく。「セルジュ、気を付けろよ。あいつは、餌より御前の方を食べたいという目をしているぞ」と注意する。

だいぶ疲れた。とても広い自然動物園だ。出来て間もないのだろう。観光客が急増して作った動物園だ。先進国の失敗を知った上で行き着いた理想に近い動物園なのだろう。後進国の有利な点だ。動物園を出て、バスが迎えに来ていた。しかしそこにはアシカなどの海水動物の広場がある。皆が見学する間、私は疲れ果てたので、バスの中でクーラーを浴びて休む。皆が帰るのを待って、船着き場に移動する。山東半島のまさに先端に港があり、観光船や貿易船が行き来する。観光船に乗って、北に浮かぶ島に向かう。この島は朝鮮半島に最も近く、戦略的に重要である。30分ほどで着いたら、島の反対側に通じるトンネルがあり、その中を300mほど歩いた。Jie が「このトンネルは軍事目的で掘られたものだろう」と。私もそう思う。

長く暗い軍事トンネルを抜けると、すばらしい風景が待っていた。山水画の世界のように切り立った岩の間にきれいな砂浜が広がる。Jie が「AAPPS の本部をここに置こうぜ。ここをプライベート・ビーチにして、白熱した議論の後に、皆で泳いで頭を冷やす。いいじゃないか」と。大賛成だ。この無人の島に滞在すれば、頭もクリーン、良い議論ができるだろう。その後、1000m程度の島の頂上に登って景色を見る。上る前、セルジュも私もくたくたで、セルジュが「あいつら俺を殺す気だ」と。頂上からの景色はきれいだった。南東に「天尽きる先端」が霞んで見える。太陽も沈もうとしている。

砂浜で学生達がとても仲良くはしゃいでいるのをセルジュと見ながら、私が感想を述べた。中国は一人っ子政策。従って、皆、兄弟姉妹がいない。そのせいか、友人は兄弟姉妹と同等なんだ。だからあんなにみんなではしゃぎまくる。単に仲が良い友達同士という域を超えたつながりが皆にあるように思われる。Jie Zhang が家父長のような、と前に書いた。まんざら遠からず、だ。Jie Zhang の研究室は一つの大家族なんだ。多数の兄弟姉妹とお父さん。学生達が無邪気に遊ぶ姿を見ながら、そのような気がしてきた。そんな牧歌的雰囲気、うらやましく思った。

いよいよ、遠足も終わり。港に帰り、バスに乗る。正直「ホッ」とした。今日だけで6キロは歩いたか。通常なら、ルンルン気分を楽しむのだが、まだ、二日酔いが応える。死にそうだ。帰りのバスは皆疲れて静か。帰りは海岸線を通って夕日を眺めながらホテルに戻った。

8. 中国英語教育事情とカラオケ大会

ホテルについて夕食。何とか、食欲も出てきた。菲鹿(Feilu)が、最終のパワーポイントファイルがほしいという。しかし私は極端な睡眠不足。「ごめん。食事がすんだら速、寝る。明日の朝にしてくれ」と。言ったとおり、9時には寝て、朝の7時に起きた。10時間の睡眠で、翌

朝はすっかり元気になった。食欲もある。現金なものだ、人間なんて。

8月10日(火)、講義再開。あと二日だ。この日も午前2件の講義と午後1件。私は第4章、第5章と講義を進める。午後の講義の後、学生達は泳いだりしていたが、私は部屋でゆっくりした。小柴さんの「やればできる」(新潮文庫)を読み終わる。薄い本だが、彼の研究に対する明確なスタンス、教育に対する配慮。実践し、成功した人だけが持つ自信と満足感のようなものが伝わっている。彼が一番強調していたのは、人との出会い。自分の人生が何とすばらしい人たちとの出会いで、有終の美を飾るに至ったか。恩師、友人、弟子への感謝の気持ちが印象的であった。

さらに、買ったDVDのブラッド・ピット、ロバート・レッドフォード主演の「Spy Game」を見終わる。字幕を英語に選択しておき、聞き逃した話の筋は目で追う。夕食時、Gangが彼の息子に私の横に座れという。英語の練習をせよと。中2の息子が座る。私は、Gangの期待に応えるべく、色々な質問をした。驚いたことに、ほとんど聞き取っている。質問にもしっかりと答える。驚いたので「なぜ、君はそんなに英語が上手なのか」と聞いた。彼の答えは以下の通り。

彼は小学校一年から学校で英語を習っている。どうも、中国政府が10年ほど前に決めたそう。そして、英語の先生はアメリカ人。週に二回、学校に来て教えてくれる。「お前の小学校は特別なのか」と聞いたが「いや、普通の小学校で、今は、皆、小学校から英語を習っている」と。びっくりです。セルジュにこのことを伝えたら、「フランスでも英語は中学から習う。信じがたいね、この国の教育は」と呆れていた。この国が英語教育にいかに熱心かは、以前、上海の書店で教科書の並ぶ中で英語のテキストや参考書が極端に多いので理解はしていた。しかし、小学校からA,B,Cを教え始めるとは驚いた。彼は「僕、幼稚園でも習っていた」だって。彼らが社会の第一線に出る頃には、流暢に英語を喋る中国の研究者やビジネスマンが世界中で活躍することになるだろう。その頃、日本はどうなっているのだろうか。

夕食を終え、部屋に戻って本を読んでいたら、菲鹿(Feilu)から電話があった。海岸を散歩したいと。望むところで、一緒にビーチに出かけた。菲鹿(Feilu)は今回、みんなの準備や、例のSISSAのイタリアの先生が着くやいなや、激痛に襲われて、入院。腎臓の手術をしなければならない、という状況になり、医者といタリアの先生との通訳を勤たりで、ビーチにさえ来るのは今晩が初めて。靴を脱いで子供のように砂浜を歩き、そのままヒザまで海につかって大喜びだ。今回、彼女が夏の学校一切を任されており、我々との事前の連絡から、迎え、観光案内、教材の用意、ホテルの支払いなどの交渉ごと。加えて、同宿の香香(シャンシャン)は病気になるわで、講義を聴く時間もほとんど無かった。見ていると、冷たいほどに皆、菲鹿(Feilu)に任せっきりである。菲鹿(Feilu)は睡眠時間も削って、病人の面倒を見たり、良く動き回っている。Jieの方針は、一会議一人の世話人とし、訓練を兼ねて全て任せる。まかされた人は大変だが、それだけの成果はあるだろう。

今晩は8時に一階のホールに集合。カラオケをやるそうだ。「Karaoke」は日本が誇る世界共通語の一つ。カラオケの意味を聞かれる。「空のオーケストラ」を縮めて「カラオケ」かな(正解でした)。直径10m程度の食堂にステージが用意され、常時、カラオケが出来るようになっている。分厚い歌のメニューは中国語だけでなく、韓国語、日本語、英語とある。皆に歌え歌えと言われ、女子学生が「この歌、歌って下さい。中国でとても有名で、私、好きなんです」と、谷村新司の「昴(すばる)」を示すではないか。こういう時は、恥も外聞もなく、要望に

応えるべし、で、歌った。歌えた。鄧麗君（テレサ・テン）の歌も、ご指名により、この女学生とデュエットで。歌の後に毎回コンピュータ判定が出る。何と百点だった。千昌夫の「北国」がこの国ではとても親しまれているようで、これも歌わされた。そこに、Jie Zhang が中国語でデュエットしてくる。彼は後で、中国語の歌詞を見ながら歌ったが、驚くほどの歌唱力だ。菲鹿(Feilu)も積極的に、どんどん歌う。なかなかの歌唱力。皆、うまいんだ。感心しました。歌いながら、飲みながら、聞きながら、11時で私は失礼した。そうだ、レーザー研に実験に来る金君が玄人並みのうまさだ。

さて、最終日。今日は午前中でおしまい。セルジュと私の順で講義をする。Jie Zhang は会議があるとかで朝早く北京に立った。Zhao Gang が「Jie が宿題を出してくれと言っていた。皆に解答させてメールで送らせるから、講義の最後に宿題を出してくれ」と。そこで、後列に移り、全6章の講義の中から一問ずつ、合計7問考えて、タイプした。正味講義は3日半。一日、5～6時間の計算だが、この程度が丁度良さそう。Jie とGang との話し合いで、この「ラボ・アストロ夏の学校」は中国として毎年開催することに決めていた。私に声がかかり、日中協力を帰国後すぐに申請し、その財源も使いながら、次年度から日本の学生も含めてやろうではないかという話で合意した。

講義は12時ちょうどに終わることが出来た。皆の拍手をいただきながら、無事終了。講義をした私にとっても、なかなか有意義だった。Jie とGang に感謝しよう。そして、パリから駆けつけてくれたセルジュにも。今日は、夜8時20分の飛行機で煙台を立つ。学生達は夜行バス。従って、夕食は4時半（とうてい食べれないよ）。部屋は6時まで使えるそうで、6時にはタクシーで威海から煙台に移動する。高速を使って1時間程度。タクシー料金は150元程度のようなうだ。

滞在中に気づいたことなど。私たちのホテルの海岸部分は庭を整備中だった。石垣を作り、整地する。見るからに田舎から出てきたという労働者が建設現場で働いている。感心したのが、工事は朝の6時に始まり、夜8時頃までしている。同じ人間が働き続けているのか不明だが、この国では安い労働力と豊かな建材で、いとも簡単に工事をしてしまう。滞在した5日間に石垣はほとんど完成した。ホテルには色々な色の大理石を使っている。中国の大理石は有名で、日本はこれを輸入している。確か、雲南省で良くとれると聞いた覚えがある。北京もそうだが建設ラッシュのこの国では人手不足や資材不足などほとんど無い。「行け行けどんどん」で、高度経済成長の真ただ中である。

中国では結婚しても女性は仕事を続ける。Jie の奥さんは得意の英語を生かしてか、英国系の貿易会社に勤めているそう。中国都市部4億人の家庭が夫婦共稼ぎで働いている。その労働力は日本の8倍はあると言える。これも中国の高度成長を支えている要因の一つだろう。

9. 中国物理学会会長Yang 教授との会談

8月12日（木）。今日は、9時半から中国物理学会（会員3万5千人）のYANG Guo-zhen会長と会談が予定されている。理事のJie Zhang に来る前から依頼して、組んで頂いた。私は日本物理学会の国際交流責任者で、日中の協力協定を締結する話し合いと、アジア太平洋物理学会連合(AAPPS)を日中が主導的な役割を果たして活性化するための中国の理解と支援を要請するための話し合いである。Jie に連れられて物理学研究所の応接室に案内された。中国物理学会

の本部は、宿舎のすぐ横のモダンな物理学研究所の最上階にある。2002年12月に日中ワークショップで来た際、訪問し、AAPPS 理事のNie 教授と面談した。蛇足だが、その際の記念撮影が最近刊行された中国物理学会のパンフレットの「国際交流」のページに掲載されている。見て驚いた。英語、中国語の説明があるが、中国語の説明は「2002年12月、中国物理学会接待来訪的日本物理学会客人」。

AAPPS の事務局設置問題に関する日本側の提案への中国物理学会の正式の反応を確認する必要がある。中国側は会長のYang、AAPPS 前理事のNie、AAPPS 次期理事候補Jie Zhangと事務局秘書の4名。まず、会長とは初対面なので自己紹介をする。彼の専門などについても聞く。驚いた。専門はレーザー物理。年齢は50代半ばか。本来なら文化大革命の影響で、「空白の世代」のはずだが、話を聞いていたら、ハーバード大学に留学していて、非線形光学でノーベル賞を受賞したブロンベルゲン教授の下で学位を取得したそうである。Jie Zhang が99年に帰国してレーザー実験グループのリーダーに就任するまで、彼がレーザーの責任者だった。冗談半分に「研究組織では、Jie Zhang は今の私のボスです」と。口数の少ない会長であった。会長やNieさんは、日本に事務局（彼らはSecretary Office と表現）を恒常的に設置することは賛成する。しかし、交通の便など考えて提案してほしい。これが、中国物理学会としての正式の回答であった。これ以上の記述は控えよう。

私は、日本と中国が緊密に連携してアジア太平洋の物理の活性化が不可欠と考えている。それを、国際核融合実験炉ITER を例に出して説明した。ITER の善し悪し、賛成反対は別にして、昨年12月のワシントンでの6ヶ国会議で中国はフランスを支持、日本は日本誘致を主張し、両者が対立した。その結果、もはや科学者の手を離れ、政治の世界での決定段階になってしまった。もし、AAPPS で日中が常時議論する場を持っていれば、ワシントンの前に韓国を含め3ヶ国の科学者同士で意見をぶつけ合い、3国としてのまとまった見解を見いだせたかもしれない。そうすれば、科学者がサイトを含め決定することができたかもしれない。そのような、アジア内での予備的な議論が常になされるような環境を作る必要がある。これについては、趣旨は理解して頂いた。しかし、Jie Zhang が「フランスを支持したのは政治的判断ではない。私たち科学者が何度も話し合いの場を持ち、科学的な見地からフランス優位の判断を下した」と。彼がITER にまで関わっているとは知らなかった。いずれにせよ、事前協議を3国でもてたら、違う展開が期待できたかもしれない。同じようなことをこれからも繰り返すべきではない。この意味でも、AAPPS の活性化は必要であると。

今回の話し合いで、中国が活性化に前向きであること、事務局を日本に置くことを支援すること、次期会長を日本から出すことについても支援すること、を確認した。しかし、事務局の設置場所については中国として譲れない一線があることも確認できた。私から、将来的にさらに活性化が求められる時、中国に第2事務局を置いて日中が密に連携して世界第3局の物理学会連合を構築していきたいとの希望を述べた。これに対しても賛同の意志を確認できた。同時に、Yang 会長から日中協力協定を中国物理学会の次期理事会で正式に取り上げ審議の後、締結したいとの言葉をいただいた。2時間の会談で終了。会長は別件の昼食会があり早々に出かける。会談の印象として、中国との関係は誠実にこちらが対処すれば、彼らも誠実に対応してくれること。人間同士の篤いつながりを感じたこと。会談の成果としては十分であろう。

10. Jie Zhang との別れの昼食会

会談を終え、今日からJie Zhang は西安に出張とのことで、セルジュ、ステファンを含め皆を、国家天文台近くの有名なペキンダック・レストランでの昼食に招待してくれた。Jie Zhang (45才) は最年少のアカデミー会員である。彼は、昨年9月にアカデミー会員(中国では「院士」と書く)に選出された。自然科学は医学、理学、工学とあり、彼は理学の会員。理学は会員数600人。(アカデミー会員は「実際の年齢-30」を会員の現役研究者年齢と互いに見なすそうだが、彼の場合はこれが適用できない初の例になったそうだ)。また、全中国に広がる84の基礎科学関係の研究所の総責任者でもある。1月に総責任者に就任し、初年度は全ての研究所を視察しなければならない。既に、43の研究所を視察した。今回は西安にある6つの研究所の現状報告を受ける。一日繰り延べて、今日、立たねばならないことになり、晚餐の代わりに昼食となった。ペキン・ダックが丸ごと運ばれてきて、そこで、なれた手つきでコックが切り刻む。まず、私がセルジュとステファンに食べ方を教える。ここで、Jie Zhang とは分かれて、再会を期す。

物理学研究所の宿舎に帰る。2時に、学生が迎えに来た。レーザー実験室の見学だ。学生の金君が説明してくれる。中国の上海には神光という大出力レーザーがあり、成都には星光という大型レーザーを建設中である。北京にはJi(漢字がない。「木及」で一つの漢字)光(JIGUANG;「オーロラ」の意味。略してJG)という名の超高強度短パルスレーザー装置がこの物理研究所にある。実験室は2階で、安定度が要求されるレーザーを何故2階に作ったんだと言われるそう。10TW レーザーがあり、現在、100TW に増力中。実験室の手前のパネルで説明してくれる。パネルの一枚が、このグループから発表された論文リスト。2001-2003 の3年間にPhys. Rev. Lett., Phys. Rev., Phys. Plasmas という米国の著名な論文誌に30本は発表している。中国で最も活発な研究グループと評価されているとのことである。台風が近づいているようで、雨模様だ。学生の部屋でセルジュがメールをチェックしている間、私は学生達と話す。皆、仲が良く、夜遅くまで実験しているそう。

11. セルジュ達と3人でホコ天にでる

5時には見学を終えて、部屋でまどろんでいた。すると電話。ステファンが「これから、町に出ないか」と。タクシーで行く。私が漢字で書いた住所で通じる。前に行った北京の銀座通り。行く前に、宿舎のロビーで受付嬢に何時頃まで店が開いているかと聞いた。すると、ほとんどの店は一晩中、開いているという。「24時間か」と聞くと「そうだ」と。驚きながら出かけることにした。確かに着いたところはにぎやかな通り。店も見ながらぶらぶらとする。「ホコ天」に入る前に大きなゴシック調の教会がある。ねずみ色の教会を花が囲む。北京には似つかわしい風景だ。「新東安市場」という名の大きな大きな百貨店がある。その手前の横道をそれたところに沢山レストランがあるので、夕食にした。横道にそれると、300mほどにわたって延々と道路沿いに屋台が出ている。人のにぎわいで活気がある。つまみたいところだが、お腹のことを心配して屋台は遠慮することにした。

「香港美食城」というレストランがあり、ここに決める。大変なにぎわいだ。見ると周りほとんど外国人。私が適当に見繕って注文した。スープ、広東炒飯、牛肉、豚肉、野菜、貝柱、と注文したら、「多すぎます。食べきれませんよ」とウエイトレスに言われ、貝柱はやめた。確かに出てきた量は値段の割に多い。乾杯して、ゆっくり食事をすする。ステファンは炒飯が美味しいと、よく食べる。確かに、威海では炒飯のような庶民の食べ物は出なかった(ただし、白い蒸しご飯はでたが)。ここでゆっくりした後、通りをぶらつく。私はCDショップをまた

見つけ、DVDをわんさか買った。古いものから、新しいものまで。CDも。今までの経験で迷った時は買うことにしている。買おうかなと悩んで買わずじまいで後悔したことが若い頃に良くあった。そこから学んだ教訓だ。セルジュ達は下調べ、という感じで店を覗いている。彼らにはあと3日間も時間がある。

百貨店に入り地下の中国特産品売り場に案内する。手前にコーヒーショップがあり、セルジュが飲んでいこうと。私はモカ、セルジュはエスプレソ。ステファンは「いらぬ」と。モカなのにウインナー・コーヒー風にクリームがたっぷり付いてくる。出る時、セルジュがチップを置いて出たら、主人が怒ったように、こんなの置いて行かれたら困ると返す。タクシーでも釣り銭をチップで上げようとして、困る困ると返された。どうもこの国ではチップを受け取ったことが分かる警察にしょっ引かれるのではないだろうか。それくらい、真剣な顔で、困る困ると返された。このあたりで10時になり、この百貨店は閉店のようだ。従業員が逃げるように駆け出していく。後は外の店を数軒みてタクシーで帰る。

12. 天国の寺、Zhao Gang との別れの昼食

帰ってすぐ、菲鹿(Feilu)から電話があった。「ごめん、何度も電話したでしょ。ホコ天に買い物に行ってたんだ」と。あすの予定である。彼女は9時半に来る。皆で、天安門の南南東にある「天壇」という有名なお寺を見学。英語でTemple of Heaven。広い緑に囲まれたお寺で、明や清の時代に皇帝が五穀豊穡を願った所。紫色の3重の丸屋根の寺は印象的である。今日は良い天気で日差しがきつい。ここでもセルジュがコーヒーを見つけ、飲んだ。中国では一般にコーヒーというとネスカフェで、砂糖と粉ミルクが一緒になったインスタント・コーヒーをさす。外貨を使いたくないから豆を輸入せず、庶民にはコーヒーはネスカフェだよと、昔の日本のように我慢させているんだ。きっと。しかし、セルジュや私のようなコーヒー中毒には困る。この様に店を見つけてはコーヒーを飲む。

今回、来る前に菲鹿(Feilu)から来た予定表には、空きの日は天安門広場見学、紫禁城(しきんじょう)、郊外の離宮の頤和園(いわえん)などがあった。しかし、私は既にこれらは見学しているので、「見学はTemple of Heaven だけで良い。後は、講義の準備などに時間を使いたい。むしろ、天文台を訪問したい」と返事した。その結果である。なかなか良い天気で、紫色の建物が重々しく、良い記念になった。

公園を出たところで、セルジュ達と分かれる。彼らは紫禁城にタクシーで行く。別れの挨拶をする。何度も言われたが、来年のフランスでのIFSA 会議には一週間ほど前にパリに来て、彼の家に泊まれ。そして、会場のボルドー近くまで一緒に行こうではないかと。了解である。

私は菲鹿(Feilu)と天文台の近くのレストランに向かう。Zhao Gang が昨日、威海から帰り、腹痛で寝ていた。しかし、何とか直ったので、最後に昼食をしようと待っていてくれた。朝、彼女は天文台の公用車で迎えに来た。私は既にチェックアウトを済ませ、荷物をこの車のトランクに積んでの移動である。レストランに向かう道、菲鹿(Feilu)の携帯に電話がかかる。Gang が今どこにいるんだ、と待ちわびている。このレストランは落ち着いた雰囲気。店の中に竹林と水の流れがあり、良いムードだ。Gang が「あなた達が遅かったので既に料理を注文した。すぐ出てくるから食べよう。飲み物は何にする。ビールか」というので、「Very cold beer, please」とお願いした。威海ではビールがいつも生ぬるくて飲めなかった。よく冷えたビールが来た。

「青島・生ビール」である。香香（シャンシャン）も来ていた。Gang は体調の問題で飲めないで、二人で乾杯をして飲んだ。料理もドジョウくらいのウナギの煮物など。美味しい。

今日から、東京の国立天文台の野口さんが共同研究で来る。生憎、宿舎が一日しかとれず、菲鹿(Feilu)はホテル探しとか。また、菲鹿(Feilu)はあさってより、南京大学で開催される「星の進化の夏の学校」（2週間、米欧講師5人）に出かける。私の飛行機が4時20分発なので、2時半頃、食事を終えて挨拶をして別れた。Gang からは「日本の一流の研究者は良く中国のお酒を飲む。天文台の海部台長は老酒が好きでよく飲む。御前は白酒だ。これは俺からのプレゼントだ」と、立派な容器に入った白酒のペアをいただいた。感謝。また、いい人達との出会いがあった。嬉しいものだ。Jie Zhang に感謝しなければならない。

13. 京大出のスイス人セラピスト

空港に着いてチェックインも済ませた。私の便は全日空と中華航空のコード・シェア便。19番ゲートで待っていたら、目の前の航空会社の女子従業員に日本人男性2人が詰め寄っている。「俺たち仲間、バラバラの席にされた。航空会社の人間ならおまえ達の責任で、俺たちを並んだ席にしろ」と。大声なので眉をひそめる。横を見たら、白人男性が同じく眉をひそめていた。そこで、私が間に入り、「大声を出すのはやめて下さい。他の客が不愉快になるでしょ」と言う。一応これでおとなしくなった。席に戻り隣の白人とにやりと。彼が、日本語で話してきた。京大に5年間在籍し、博士号を取得したと。彼と話している間にアナウンス。並んで、飛行機に乗る。驚いたことに、彼は私の横の席だった。「偶然ですね」と話し始める。

中国には国際心理学学会があり来た。参加者は数千人で沢山の平行・セッション。彼の専門はユングなどの系統を汲む精神心理学療法。京大ではかの有名な河合隼雄の研究室に在籍した。地元はスイスの東の国境の町。3年前まで大学で教えていたが、今は自由業で精神療法治療をしている。今回は、今晚、京都まで行き、明日は午後から一般市民向けの講演会で精神療法について講演する。通訳が付くので、英語で喋ると時間が二倍かかるので、日本語で講演する予定とか。飛行機の中で私がこの旅行記を書いていたら、それを読んだのか、「あー、Yantai（煙台）に行ったんですか。そこには私の友人が住んでいます」と。それから、今回の学会で聞いた中国の道教について聞かれた。てっきり、Tao-ism をあまり知らないと思って、台湾で得た知識を披露していたら、本人はほとんど知っている。今回、老子の他にもう一人、道教で重要な人物の名前を聞いた。中国語の発音はこうだ、と発音してくれるが分からない。漢字が知りたいと。考えていて、そうだ、老荘思想だ、と荘子の名前を出す。電子辞書で大書きにして漢字を見せる。喜んでくれた。

14. おわり

中国への旅は終わった。また、いい人達との出会いがあり、世界観も広がった。招待してくれたJie Zhang に感謝すると共に、はるばるパリから駆けつけてくれたセルジュに感謝したい。初対面にもかかわらず、もう長年の知己の様に感じるGang Zhao の優しい心配りに感謝する。親切にしてくれた学生達に感謝すると共に、いつも笑顔で何から何まで面倒を見てくれた菲鹿(Feilu)に心から感謝したい。

付録 1 : 中国のレーザー核融合の父

中国物理学会が毎年年会で授与する賞に「中国物理学会五項物理賞」がある。五つの賞にはそれぞれ物理学者の名前が冠されており、その一つが「粒子物理和慣性収束核融合」の分野を対象にした王淦昌（ワン・ガンチャン）物理賞である。ワン氏は既に亡くなられたが、旧ソ連のドブナで研究修行を積み、帰国後、中国の物理発展に寄与した。彼の名は10年ほど前から聞き知っている。私はレーザー核融合の概念発案者に興味があり、旧ソ連のサハロフがレーザーの発明のニュースを聞いてすぐ提案したレーザー核融合の方式の報告書コピーを手に入れている（ロシア語）。Jie と話していたら、ワン氏も時同じく独立にレーザー核融合の概念を提唱したようだ。その報告書はあるそうだが、軍事機密書類で公開できない。機密書類は50年後には公開されるから、後、少し待たなければ行けない。しかし、Jie は事の重要性から早く世界にその事実を公表すべきだと考えており、「内容からして今公開しても問題ないと思うので、可能かどうか交渉してみよう」と言っていた。

付録 2 : 登場人物写真

前列、向かって左より北京大学??教授、Jie Zhang, 高部、セルジュ、Gang Zhao。後列向かって右端、菲鹿(Feilu)。あとは学校に参加した大学院生達。（写真は「Aki Photo Diary」を見てください）

付録 3 : 地図

省略

付録 4 : 日本の3次にわたる山東半島出兵

今読んでいる本「一死、大罪を謝すー陸軍大臣阿南惟幾（あなみこれちか）ー」（角田房子著、PHP文庫）に大正末期から日本陸軍がいかに横暴に政治の舞台に登場してくるか書いている。59ページに、昭和2年、新首相となった田中義一陸軍大將が外相を兼務し、対中国外交を強硬方針に変えたとある。蒋介石の国民政府軍の北伐で各地の日本官民への暴行が頻発した。田中内閣は5月28日、「居留民保護」を名目に第一次山東出兵を行った。翌年、6月4日、張作霖爆死事件が起こった。これは、軍閥の張作霖が中国全土に広がる排日運動に突き上げられて態度を変え、日本の満蒙利権に対する要求をなかなか受け入れなくなったことが原因である。これは関東軍参謀河本大作大佐が首謀者であった。7月7日、日本政府は満州を中国本土から切り離して独立の政権下に置く「満蒙分離政策」を内外に発表。そのため、中国の排日運動はますます激化した。田中内閣はその後、1年間に第2次、第3次と山東半島への出兵を続け、華北を抑えた。

付録 5 : 私の講義の概要

- 第 1 章 : 実験室宇宙物理のための予備知識
圧縮性流体の物理 / プラズマ物理 / 原子物理
- 第 2 章 : レーザー生成プラズマ
レーザー / 電離 / 加熱 / アブレーション / X線への変換 / 計測手段 /
- 第 3 章 : 実験室宇宙物理全体像
- 第 4 章 : 無衝突衝撃波と宇宙線の起源
- 第 5 章 : 宇宙に置ける X線レーザーの可能性
- 第 6 章 (1) : 若い星に見られる恒星ジェット
(2) : 相対論的プラズマと宇宙ジェット

付録 6 : 学生への宿題

1. Proof that a rarefaction shock, the density decreases across the discontinuity can not be allowed physically.
2. What are the soliton and collisionless shock in magnetized plasma? What physics does keep such stationary solutions?
3. How high temperature can you get when 1.8 MJ laser is absorbed by plasma whose density is 10^{22} cm⁻³ and the radius is 1mm. Assume hydrogen plasma.
4. Estimate the radius of a white dwarf with one solar mass which is completely degenerate. Do a simple dimensional analysis with the uncertainty principle for degenerate pressure.
5. Based on the self-similar solution of blast wave, how long time you have to measure in laboratory to model a SNR evolution of 10,000 years. Assume that the energy of supernova is 10^{46} J and the density of inter-stellar matter is 1 particle/cm³, and laser energy is 10 kJ and gas density is 10^{17} cm⁻³.
6. Describe under what condition the photo-ionization becomes dominant for the hydrogen plasma with density 10^{22} cm⁻³ and temperature 50 eV. Assume the external radiation is Planckian.
7. Describe the physical process to produce positrons with ultra-intense lasers.